

エッフェル塔とジュミンジド

—新しい景観の容れをめぐって—

荒又美陽

1. パリのシンボル

エッフェル塔といえばパリ、パリといえばエッフェル塔。ある都市のシンボルとして、これほど有名なものが他にあらうだろうか。両者は相互に密接に結びついているので、塔が写真や映像のごく一部にうつっていても、それがパリであることを知らせるものとなる(写真1)。モニュメントの見え方を保護するために厳しい規制があるパリにおいては、街を散策している途中でエッフェル塔が印象的に現れる地点も数多く、「ああ、パリにいるのだ」と実感する。初めてパリに行ったなら、エッフェル塔を背景に記念写真を撮っておこうと思う人も多いだろう。ところが、建設当時の名称でいう「300mの塔」は、近くまで行ってし

まうとファインダーにおさまらない。ガイドブックにはここなら上手に撮れるという場所が示されていることもあるが、もちろん塔からは少し離れている。写真だけのために遠くまで行くニーズがあるということだ。凱旋門の上にも、エッフェル塔の方向に写真撮影に使える台があり、そこに乗るとちょうどよく写真が撮れるというわけで、いつも行列ができています。

このように世界中に知られ、おびただしい数の写真におさまっているエッフェル塔は、必ずしも建設時から現在まで同様に受け入れられていたわけではない。建設に反対したモーパッサンがエッフェル塔のレストランをしばしば利用したのは、そこからはこの塔が見えないからだという逸話も残っている。果たして何を「見たく」なかつたのか。

塔建設の時代背景と反対者たちの論拠をあらためて見ていきたい。

2. エッフェル塔の建設と反対運動

エッフェル塔は、1889年万博の呼び物として、20年



写真1 凱旋門から見たエッフェル塔

間の時限的な建造物であることを前提に建設された^①。当時は世界で最も高く、エレベーターで昇ることができたことから、疑いなく産業技術を誇る建造物といえる。19世紀の万博は、グローバル企業が前面に出てくる現代の万博とは異なり、国家の威信をかけたイベントであった。1855年の最初の万博から開催地を首都パリに設定し続けたフランスにとつて、呼び物となる建造物はそのまま国家の顔となる。コンペの結果選ばれたのは、ギュスターヴ・エッフェルによる300mの鉄の塔であった。

1887年に建設が開始された直後、塔に反対する「芸術家たちの抗議文」が現在の『モンド』紙の前身『タン』紙に掲載された。なぜ「芸術家たち」なのか。それは署名者が実際に作家や画家などの芸術家だったことのみならず、塔の選択に美的な観点が欠けていることを指摘するものであった。

「我々は(…)見くびられたフランスの美的感覚の名において、危機に瀕したフランスの芸術と歴史の名において、(…)無用にして怪物じみたエッフェル塔の建立に抗議するものである。(…)幾多の傑作を創造したフランスの魂は、厳かに開花した石の芸術の中に輝いている」^②

石造りで統一されているからこそ美しいパリにおいて、